九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

高野蘭亭伝巧（下）

高橋, 昌彦
九州大学大学院（修士課程）

https://doi.org/10.15017/11984

出版情報：語文研究. 61, pp.29-39, 1986-06-03. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

高野蘭亭伝攷（下）

高橋昌彦

◎元文五年庚申　三十七歳

○三月十一日、南郭の次男愿卿没。享年十七。遺稿『鍾情集』（寛保元刊）の「附吊哭詩」中に、蘭亭の詩が四首が載る。

哭愿卿秀才（其二）

陸弟誰堪レ惜　風流失二妙年一

一従二龍種去一　難レ見二鳳雛翩一

言只文章駐　名應二竹帛傳一

傚二君曽歎逝一　惆悵吊二斯篇一

南郭の跡を嘱望された人物の死に対し、他に多くの人が詩を詠じている。一方、『鍾情集』には七絶「答子式見寄」がある。

○六月十六日、本多猗蘭侯が五十歳を迎える。七律「奉賀猗蘭侯五十初度」（五）を贈る。

ここで、蘭亭と交流のあった大名を『詩集』より拾ってみる。前出した猗蘭侯・膳所侯の他に、高田侯（後に白河侯）・烏山侯・相良侯（後に泉侯・壺山老侯）・宇土侯・肥後侯（銀臺公子）・宇和島侯・諏訪侯・今治侯・佐倉侯・飯山侯・小浜侯等と「墓誌銘」に「王侯学レ詩者、什之六七出二於先生之門一」と記されたように多い。

また、その理由を高本紫溟は「列侯咸学二詩於蘭亭高子式一刻二意李滄溟一」と『桂源遺稿』（享和元刊）の跋において述べている。更に、松崎観海は、

今ノ世上ノ詩ハ蘭亭流ナリ。南郭流ニハアラズ。南郭ノ詩ハ手ガカリナリニクキユヘ、子式ノ明詩ノ風、世ニ行ハルトナリ。

（『文會雑記』一・上）

と評し、

凄婉精深新清秀華如二毛嬙西施絶世獨立一者服子（南郭）之詩也。宏大富麗雄瞻壯厳如二明堂太廟冠冕典重一者先生（蘭亭）之詩也。服子才俊骨清神韻獨勝。先生格正調高法度森厳。

（「蘭亭先生詩集序」）

とも語っている。蘭亭の詩が、詩を学ぶ者にとって、手掛かりになりやすかったのは、格調派と呼ばれる明詩の風を忠実に受け入れていたからであろう。服部蘇門は『詩語砕錦』（明和五刊）の序で「予嘗聞東都高子式。教二詩於童生一也。毎二一題出一。輙剪二截曩匠之成語一。而令二之綴続以成レ章也。」とその作詩法を伝えている。だが、詩人蘭亭は、鵜殿士寧に斯も答えている。「足下ハ世祿ナリ、予ハ詩

ヲ産業トス。詩ヲ人ニ見セザレバ餓死スト」（『文會雑記』一・下）。そこには、詩を以て、職業とする一つの生き方が垣間見える。他に『八水随筆』には、大名邸で『唐詩選』の講釈を行なう蘭亭の姿が描かれている。

○この年、刊行された『青羅館六詠』[1]（中野三敏先生蔵）中に、蘭亭の五絶「麻布岡」がある。

○蘭亭が、茅場町に新居を構えたのは、この頃と思われる。七律「卜居 再萱洲作 三首」（『懐雑』四）がある。

其一

萱洲曽別十年餘　重住萱洲賦二卜居一
園後新移江北樹　門前近釣海南魚
紅塵車馬時堪レ避　白首琴書日不レ疎
馳騁人間慙二薄劣一　還将臥レ病属二樵魚一

詩句によると、十年余り前に、一度、この地に住んだとある。家が崩壊してまもなくという頃か。その間、どこに住んだか定かでない。この新居を祝し、南郭に七律「高子式萱洲宅成二首」（三・三）、春臺に七律「寄題子式新居」（後・二）、雲夢に七律「寄題子式新居」（五）がある。ここでは、鳥山矣大久保忠胤の『椿居詩鈔』（嘉永三）より、五古「高隠士子式」を引く。

子式吾良友　高名世所レ知
十年混二時俗一　振起大雅辞
騒兼宋玉思　情信潘岳詞
沉鬱学二老杜一　精微似二王維一
別有痾癖在　同病識者誰
近來帰二舊巷一　人人載レ酒時
不レ獨門弟子　我亦欲レ窺レ奇

門弟も増え、落ちついて居を構える必要にせまられ、先に住んだこともあり、師徂徠にも関係深いこの地を選んだのだろう。そして、ここが、蘭亭終焉の地ともなる。

◎寛保元年辛酉　三十八歳

○五月十五日、松崎白圭が六十歳を迎える。蘭亭に七律「崎子允六十初年度宴集」（『懐雑』四）が残る。

○十一月朔日、高田矣松平定賢が白河に移封。七律「高田矣移封白河」（五）がある。また、その家臣である蓋公疏に対し、七律「送蓋公疏宦白河」（五）を贈る。蓋公疏は『懐雑』（二）に「二村忠蔵」と註がある。度度『詩集』に登場する人物の一人である。

◎寛保二年壬戌　三十九歳

○春、荘田豊城の『芙蓉之圖』（寛保三刊）が成立。蘭亭に七律「荘子謙登芙蓉圖帰因以為賦」（『懐雑』三）が残る。豊城は、豊後臼杵の人。日野龍夫氏により『豊城詩集』（早稲田大学図書館服部文庫蔵）が紹介されている（未見）。他に『荘田豊城文稿』[2]（国立国会図書館鶚軒文庫蔵）が写本として残る。同書に、蘭亭の居室について書いた「匏繫居記」が載る。

○二月二十三日、雲洞上人没。享年五十。七律「哭雲洞上人」（『懐雑』三）がある。雲洞上人については、春臺に「暁山上人墓碣」（後・十一）がある。

○七月二十八日より降り出した雨は、八月中にその被害を関東筋都てに及ぼした（『武江年表』）。蘭亭は、五律「壬戌八月江水大溢聊知述」（三）を詠んでいる。

○この年の作として五律「病中口號」（三）がある。

生涯三十九　散レ髪已蕭然
身似二文園臥一　名非二国語傳一
雙明先自喪　一病更相憐
未レ竟千秋業　裁餘有二太玄一

己が身を左丘明に比す手法は、蘭亭においてしばしば繰り返される。あるいは、蘭亭の中には、経学で身を立てたいという意識が残っていたのであろうか。ただ、その詩句から、当時を風靡した詩人の俤は顕れず、快々とした思いだけが感じられる。

◎寛保三年癸亥　四十歳

○四月、宇和島藩主となった伊達村候[3]が、初めて封地に向かう。蘭亭に七絶「奉送伊達公子還豫州二首」（九）がある。

◎延享二年乙丑　四十二歳

○四月二十八日、春臺門下の関口黄山没。享年二十八。五律「哭関世篤」（二）が残る。

○この年、春臺門下の土屋縄直が、御書院番の役として駿府に向かう。蘭亭に、七律「送土屋縄直衛駿府」（五）があり、観海に「送土殿中郎準夫戍駿府序」（六）が残る。その後、駿府の縄直から、書と詩が届いたらしく、七律「得土準夫駿中書及詩答寄二首」（六）を作り応えている。

◎延享三年丙寅　四十三歳

○正月、老中堀田正亮が播磨河内及び出羽国の封地より、上総下総に移封。七律「奉送元老紀公移封佐倉暫之国」（六）が残る。又、五絶「為元老佐倉侯題圓硯」（八）が、同人に対して他にある。

○二月二十九日夜、俗に坪内火事と呼ばれる大火が起こる。幕府は、三月六日「屋舎營造は。しばしなすべからず」（『惇信院殿御實紀』巻三）と令を出す。この大火で蘭亭も焼け出され、五律「罹火後未定居戯賦」（二）を賦している。大内熊耳に、七律「高子十式罹災後賦寄」（『熊耳先生文集』三）がある。

○九月、相良侯本多忠如が、奥州泉に移封。これに関する詩は残らないが、その後、泉侯として『詩集』に登場する。

○年内には、茅場町に新居を築いたらしい。

ト居雑詠七首（其一）
舊住護洲地　新營一草廬
江雲當レ戸落　嶽雪映レ窓初
丘壑違レ高レ臥　滄浪足レトレ居
要津吾豈敢　為レ食武昌魚

（『詩集』三）

この新居には、合わせて層楼を築いたらしく、七律「明月楼」（六）が残る。その後、明月楼は、詩人たちの集会の場として、多くの詩集に登場する。

◎延享四年丁卯　四十四歳

○五月晦日、太宰春臺没。享年六十八。七律「哭太宰徳夫二首」（六）が残る。葬儀の模様を『文會雑記』（二・下）は、

葬礼ノ時上下三四百人会葬アリシトゾ。曲江（土屋縄直の号）ナドハ病中ニ夜四ツマデヅヽ語ラレタルト也。又毎日ノ見廻四五十人モアリシトゾ。葬ノ時南郭、子式モ行レシトナリ。

と記す。又、同書は「春台葬礼ノ式」として葬儀の道具や人事をも伝えている。

○その後、春臺門下の一人であった田元麟が詩を学ぶため、蘭亭の許を訪れる。五律「田元麟嘗事太宰徳夫没後請学詩於余余與徳夫為

同社故於元麟無忌賦示」（三）が残る。元麟は『文會雑記』の語り手の一人として登場するが、その人となりは明らかでない。観海に五律「哭田元麟」（三）があり、「可レ悲千載下　無二復識一斯人一」と詠じられている。また、「田生恒有字説」（十一）において、元麟という字が、春臺の絶筆であり（孔子の「春秋」の記事が、麟をとらえた事件で絶筆となる）、志をこめたものであることを説いている。

この田元麟をはじめ、観海・稲垣長章等、春臺門下で蘭亭に詩文を学ぶ者がいることは、経学と詩文の分業化を示していると共に、南郭と春臺の確執が、蘭亭門との交流を盛んにしたとも考えられよう。

○この年、肥後藩文学秋山玉山と出会うか。この年以前に、肥後藩支藩の宇土侯（細川興文）や銀臺公子の名が『詩集』に見える。また、この年八月、銀臺公子は、肥後藩主となり、重賢を名のる。その頃の作として七律「上肥後侯」（十八）が残る。今日、永青文庫に『東里詩稿』（写本一冊）が残る。総詩数五百十三首（内訳、五律七十九首、五排九首、七律百七首、五絶五十七首、七絶二百五十八首、七古一首、六絶二首）で、肥後藩に係わる人物名を詩題は多く含んでいる。『詩集』未所収の詩も多い。肥後藩と蘭亭の結びつきの強さがわかろう。他に同文庫蔵の『諸先生詩集』（一巻）巻頭に、蘭亭の詩二首が掲げられている。

玉山との出会いは、肥後侯の詩会という場であったろう。その逸話については、徳田武氏の論に詳しい。ここでは、知り合って間もない頃の作として五律「寄秋文学子羽三首」（三）を引く。

其一

大國多二奇士一　儒生席上珍
聲名傳二異代一　翰墨屬二何人一
抱レ璧光長照　披レ雲望更新
看レ君愈貴重　豈合厭二風塵一

◎寛延元年戊辰　四十五歳

○三月二十五日、越智雲夢没。享年六十三。五排「哭越君瑞三首」（三）を作り、その死を痛む。

○春、将軍家重の襲職を賀する朝鮮使節団を迎えるため、備前岡山藩文学井上蘭臺が、初めて備前に赴く。七律「送備藩井子叔之國迎接韓使」（十八）を贈る。蘭臺については、中野三敏先生に伝がある。[5]『蘭臺遺稿』（天明六刊）に、蘭亭の名も見受けられる。[6]

◎寛延二年己巳　四十六歳

○「墓誌銘」に「己巳以後諸作、鎌倉詩居二其半一」とあるように、この年より、鎌倉に関する詩が多くなる。それ以前にも、鎌倉に行ったことは何度かあるらしく、『懐仙楼集』に七律「送高子式之相中」（五）とあるのは、元文四年頃の作と思われる。蘭亭にも、この年以前の作として、五排「遊畫島」（五）や五絶「鎌倉雑詠二十首」（八）がある。その地に築いた草菴については七律「松濤館」（六）があり、草堂五勝についても「鎌山草堂五絶」（八）が残る。

鎌山草堂五絶（薜荔門）

柴門懸二薜荔一　翠蔓垂二壁上一
此中讀二離騒一　山中窺レ人照

この他に、鎌倉に関する詩は、『詩集』より五十余首拾える。且つ、江戸に帰っても鎌倉を語ることがあったとみえ、『桂源遺稿』には、五律「聞高子式談鎌倉名勝賦此贈之」（上）なる詩も見える。晩年、いかにこの地を愛したか知り得るだろう。

その鎌倉の詩の中に、五絶「遊鎌倉観平中将幽囚與美人對酌之杯慨然有懐古之感率爾為賦」（五）がある。この盃が話頭となる逸話が『笈埃随筆』（巻十二「雑説」）に残る。

相模國教恩寺に、中将重衡卿と千壽前と酒宴せし時の盃有り。大さ今の世の平皿のごとし。内外黒塗にして中に梅花の蒔繪あり。予東武にありし時、高野蘭亭といひしは盲人にて詩人なり。いかゞしてかこの盃を乞得て所持したり。因に云、此盲人髑髏盃を拵んとて、よのつねの人はおもしろからずとて、鎌倉にある大館次郎が塚をあばきけるに、忽ち晴天かき曇り、雷鳴雨夥しかりけるを辛ふじて取て帰り、盃とし楽みけるに、其翌年其月其日に死したり。平人の塚すら猥にあばく事はあるべからず。ましてや勇士の霊何ぞ其儘に置べき。此もの元來盲人にて、詩作などする気質ゆへ、慢心甚しき故にや。かゝる災ひにも逢へり。可恐愼」。

髑髏杯に関しては『玉山遺稿』（一）に七古「髑髏杯行」がある。事実、蘭亭は髑髏杯を使用していたと思われるが、玉山は、それが何者の髑髏か知らないと記している。百井塘雨のこの随筆を引いて、伴高蹊は『閑田次筆』巻四で、

其中にて此盲人がごときは、ことに無頼といふべし。凡ッ小人の才能あるは、禍の基なるべし。

と護園門批判の材料としている。この弁護は原念齋の言に任せる（『先哲叢談』巻八「高惟馨」）。

◎寛延三年庚午　四十七歳

○元日、七律「庚午元日」（六）がある。

○この年、備前藩に帰る湯浅常山に対して七律「送湯之祥帰備藩」（六）を贈る。『文會雑記』の筆者であり、観海と親しかったこの人物は、何度か蘭亭と会ったと思われる。七律「寄題備藩某常山楼」（『懐雑』五）が他に残る。一方、『常山楼集』（天明四刊）には、蘭亭の名は見い出せない。

○南郭門下の石島筑波が明月楼を訪れる。七律「石仲緑過訪明月楼携詩見贈不見仲緑已十餘年話舊喜而為答」（十八）がある。この人物の没年を宝暦四年とする書があるが、「筑波先生墓誌銘」（『事実文編』三十九）によれば、「宝暦戊寅（八年）八月十七日　享年五十一」とわかる。尚、『芰荷園文集』（四）に「今茲秋高子式卒于其家明月楼余與子式相知且三十年矣悼惜之感言何能喩因賦七律二章」とあり、徂徠没後すぐに知り合ったことがわかる。

◎宝暦元年辛未　四十八歳

○四月十三日、江戸に来ていた玉山が五十歳を迎えた。七律「鎮西秋文学從肥後侯遊東都茲歳五十賦此為壽」（十八）を贈る。

○冬、『詩集』に大川士人として、しばしば登場する大川義浚が、大徳寺三百五十七世に任ぜられ、西上する。七律「送大川禪師奉詔西上住大徳寺二首」（六）が残る。

◎宝暦二年壬申　四十九歳

○九月九日、重陽の節、烏山侯邸を訪れるが、先君常春の命日にあたる。七律「九日奉訪烏山侯云先侯忌日也悵然有作」（七）を作る。

○十二月十二日、宇和島侯が、侍従に任ぜられる。七律「奉賀宇和島侯進階」（七）を贈る。

◎宝暦三年癸酉　五十歳

○正月、新年に際し七律「新歳偶作」（七）を賦す。

○五月十二日、松崎白圭没。享年七十二。それ以前に、病気を思い

やる五律「詢崎子允病二首」(三)があり、死を痛む詩として七律「哭崎子允三首」(七)を詠む。子観海に「先考白圭府君行状」(十)がある。

○五月七日、蘭亭五十歳の賀宴が催された。観海「五十序」(七)はこの時の作。他に、横谷藍水に五律「奉賀蘭亭先生五十初度」(『藍水詩草』二)、本多忠如に五排「賀東里先生五十初度」(上)等がある。本人に、宴の際の詩は残らない。同年の詩として五律「早春」(三)がある。

五十人間世　春風一布衣
病餘今日老　名識昔年非
黄鳥時求レ侶　冥鴻尚未レ帰
歳華高レ枕處　依レ舊掩二柴扉一

○この年の作として、五律「庭際栽柳経年枝葉甚茂偶爾有感」(三)がある。「壽蔵記」は、「好蓄二古彝鼎罍洗書畫諸雅翫一、治二齋室園庭一、頗修猶尚以二少時所一習也」とその嗜好を述べている。父百里には、

自慢の柳、馴たりければ
隣へも追ふてやりたる一葉哉

(『杜撰集』)

という句がある様に、蘭亭の好みは幼い時から、その親によって育まれたものであった。

◎宝暦四年甲戌　五十一歳

○正月、泉藩主本多忠如が四十歳を迎える。七律「奉壽泉侯四十初度」(七)を贈る。

○三月二十五日、守屋峨眉没。享年六十二。五排「哭守秀緯」(四)がある。大垣藩の医官のこの人物とは『懐雑』中に交流の跡が見える。

○五月三日、土屋縄直没。享年五十七。七古「哭土準夫」(二)が残る。観海に「故書院郎土屋公墓碑」(九)がある。

○夏、「墓誌銘」によると、かなり重い病気になり床に臥す。死期の近いことを知った蘭亭は、壽蔵を築く。観海の「壽蔵記」は、

今年五十一髪如レ此種種其與幾何乃營二壽蔵于其地一(圓覚寺の後山)。謂二惟時一後生知レ我者莫二子如一也。子何不二為レ我概二次家世郷里於石一。與下其待二其就一木強為二訣墓之辞一使丙人疑乙夫不二以レ情為一文者甲也。

と、その事情を伝える。

○八月、泉藩主本多忠如が病気を理由に家督を息子忠籌(かず)に譲る。『壺山集』に七古「宝暦四年秋病免家居聊述鄙懐」(上)が見える。退いた藩主に蘭亭は七律「奉寄壺山老侯」(七)を贈り、それに答えて壺山は七律「致仕後答東里先生見寄」(上)を寄せている。

○九月、『玉山先生詩集』刊。跋として「題秋学士詩篇」が蘭亭によって撰せられる。「高惟馨」の署名と「惟馨」及び「字曰子式」の印があるが、蘭亭の書をそのまま刻したものか不明。蘭亭の書について、『先哲叢談』(八)は、

世有二蘭亭盲後書蹟一。此世人疆求者也。天履仁蔵二数張一。嘗曰。人之喜二蘭亭書一。徒供二玩弄一耳。余レ忍レ使二其蹟佗日逢二人媟黷一也。遂皆瘞二土中一。蘭亭詩。與レ人往復者。毎屬二藤華岡一書レ之。故時人或謂二華岡一為二蘭亭一之書佐一。

と伝える。伊藤華岡の名は「蘭亭先生詩集跋」に見えるが、『玉山詩集』跋の筆致と比較すると、良く似ていると思われる。『護園雑話』

においても

蘭亭の手跡を津田意秀老所持なり。酔月の二字にて殊に見事なり。此酔月の字文卿持たるが、蘭亭門人の医何某とか云ふ人に所望されやりたりと、文卿自ら咄したる由。護園にも蘭亭の手跡にて有水と云ふ二字の額、常に徠翁祠堂の前に掛ありき。

と記され、佐々木玄龍・文山に就き、更に盲目ということも手伝い、その書がもてはやされたことは間違いなかろう。前述の堀氏に贈った詩（元文四年の項）、『諸先生詩集』所収の二首（延享四年の項）、また『芙蓉館帖』（天理図書館蔵）に収められた七律「永代橋歩月」・七律「寄登富嶽人」の二首等、蘭亭の直筆と思われる。

○この年、東奥白石より、門人禅軾が江戸に来る。禅軾「書蘭亭先生詩集後」によれば、以前に三年程江戸に居り、三年振り再び江戸に出てきたとある。蘭亭への入門は、寛延二年頃か。その頃の作に、七律「春日禅軾師過明月楼」（六）がある。

この年の滞在は慌たゞしく、七律「禅軾師至自東奥為贈」（七）、五律「禅軾師寓居」（三）、七律「送禅軾師還東奥」（七）が残る。禅軾については「日本詩選續編作者姓名」が、

僧禅軾、奥州白石人、佐藤氏、以レ詩稱二于関東一。或曰、今帰レ俗在二武州川越府一、教授為レ筆、稱二要之進一、余未レ詳二其然否一。

と記す。当時の白石には、臨済宗の寺が多く存していた（『白石市史』）。[10] あるいは、その寺院の一つの僧であったかもしれない。

◎宝暦五年乙亥　五十二歳

○七月十八日、玉山が富士登山に出発した。八月二日に無事江戸に帰ったことを聞き、蘭亭は七古「病中聞秋文学帰自富嶽賦此寄贈」（二）を玉山に贈る。「富嶽記」（『玉山遺稿』七）が玉山に残る。

○この年の作として、大潮と土屋藍洲の長寿を祝い、それぞれに七絶「寄壽海西大潮師八十」（十）、七律「寄賀豊州土伯曄七十」（八）を贈っている。

○『猿橋碑銘』（宝暦十一刊、中野三敏先生蔵）中の成島錦江の撰文は、この年の十月十五日の日付けを持つ。同書には、蘭亭の文も深見頤齋の書によって刻されている。[11] しばらくは、同時期の作として、この年に成ったものとする。

◎宝暦六年丙子　五十三歳

○この年、病気が小康を保ったとみえ、鎌倉に行く。七絶「鎌臺雑詠四首」（十）が残る。

其三

大海潮流弔二古哀一　漁磯返照傍二荒臺一
驚濤日夜鳴無レ極　猶レ似軍聲萬馬來

其四

峭壁天高宿夜雲　渓流斜繞石欄分
山窓夢断窺二殘月一　惟有風杉傍レ枕聞

およそ、故事に振り回されることの多い蘭亭の詩において聴覚が鋭敏に働く。

蘭亭生平舉止。盡俟二相者一。於レ是不レ為二瞽者倀倀状一。嘗曰。余明未レ喪時。不レ堪レ見二盲人動摸二索其左右一也。豈今效レ之乎。

『先哲叢談』（八）は、盲人蘭亭の挙措をこのように伝えている。

盲目詩人でありながら、蘭亭の詩には、その特質を見い出せない。剽窃と評される詩句に、明詩、特に李滄溟の常套語「白雲」・「風塵」はつきまとう。ただ、『懐雑』（三）において、源稷卿「酒間詠芭蕉花得開字」中の「一朶清香此折來」に「子式云芭蕉ニ香ハ非也」[12]

と註記されていることは、蘭亭の詩作に対する態度の一端を知り得ることができよう。

◎宝暦七年丁丑　五十四歳

○六月、病床につく。七絶「病中寄五子」（十）がある。蘭亭門五子として『先哲叢談後編』[103]（八）は、「谷玄圃」の項で「松崎観海、藤山子祥、竹子徳、藤西涯」をあげ、横谷藍水と合わせて五子とする。この記述は『古今墨蹟鑒定便覧』（弘化五刊）に受け継がれ、更に細かい註が『先哲叢談續編』（七・「松崎観海」）に附され、「観海、谷藍水、藤山懐月、竹鳴鳳、近藤西涯」と改めて記してある。だが、西涯の名は『詩集』に見えず、同じく『西涯館詩集』（寛政九刊）にも蘭亭の名は捜せない。同時代人であり、接点が考えられぬわけではないが、西涯の思想的背景を考えると、『先哲叢談』の誤りと考えた方がよい。詩は、最後の一人として禅軾に寄せる。詩を引き、まだ触れぬ人物に関して述べていく。

故人誰唱子桑歌　華髪風塵伏レ枕過
終向山中蔵レ病骨　白雲千載満レ巖阿

右観海

「観海集序」（熊阪邦撰）は言う。「先生（観海）嘗以二高子式一為二天下一人知己者」と。観海の詩文集は、巻五まで刊行。それ以降は、稿本として天理図書館に収められている。本論文の引用もそれによっている。

一身何處葬二相州　傲吏無レ由作二客遊一
君但提二携龍劍色一　夢中應挂白楊愁

右子祥

「日本詩選姓名録」に「藤山氏、字子祥、俗称五郎兵衛、東都人、仕二松平筑後侯一」とある。松平筑後侯は、杵築侯松平親貞。『藤山詩論』が『南郭先生燈下書』に附されて写本として、国立国会図書館に残る。『国書総目録』は著者を服部南郭とするが、同書には

藤山維熊ハ蘭亭の高弟詩を以て世ニ鳴ル此書ハ岡田長郷へ答候国字牘の写也

と前書がある。内容は、詩論・歌論に至るまで徂徠の考え方をそのまま踏襲している。その執筆時期を窺わせる箇所として

此所詩道の変し候時節と被存候、恐くハ此後に袁仲郎鐘伯敬を尊信して世に行わるへき勢ニ見へ候、當時も都下ニ伶利の一少年、袁仲郎鐘伯敬を唱候て、徠翁を猥りニそしり、嘉萬（嘉靖萬暦）の諸家を破除いたさんと構へ候、平安浪華の諸名家ハ、ヒョロ〳〵と新渡の唐山道理を畧伺候故、力量ハ無之よふニ被存候

など、山本北山の『作文志彀』（安永八刊）・『作詩志彀』（天明三刊）に対すると思われる内容も見える。

牀頭臥レ病子雲亭　寂寞終無二車馬停一
曾是侯芭堪レ問レ字　文章焚盡太玄経

右文卿

蘭亭没後、その名声を受け継いだ藍水には、盲人という共通点から、『詩集』中に、その体を気づかう詩が多く見える。『随筆辞典』（解題編）に引かれた「医賸」[104]の一条は、藍水の奇人ぶりを伝えている。

十年燕市與レ君歓　傲骨由來任二酒闌一
惟見北風吹二易水一　千秋擊レ筑不レ禁レ寒

右子徳

「竹川政辰　字子徳、伊勢人」と「日本詩選作者姓名」は伝え、同

書「採擇書目」は「馬陵詩稿　竹政辰詩鈔未レ刻」とその詩集の存在を述べる。又、『懐雑』（五）の註に「竹川彦兵衛」とある。更に『三村竹清集四』・「韓天寿」中に引かれた手紙には、

……祖父ノ兄馬陵山人西山居士（竹川新宅ヲ建ノ人也）徂来門ニて詩ニ高名ノ蘭亭先生ノ門人高足五子ノ一人也、是も五十ニ不及死去候得共、詩文集自集十冊計清書いたし有之、中川天寿ハ儒ハ馬陵門人也・天寿ト云名乗は、馬陵ノ撰ニ而、タカカズト云ナノリナリ、馬陵ノ於東都一夜百首ノ筆者は韓天寿也、祖父歌集之内、古今六帖題小冊別ニ有之候間入御覧候、跋ノ政辰（トキ）トアル則祖父政意之兄馬陵先生也　（竹川二代竹斎の手紙）

とあり、竹川政辰が、経世家として著名な竹川竹斎（二代）の祖父の兄であることがわかる。その没年は、正確にはわからないが、本多壺山（安永二年没）に五律「哭子徳三首」（上）が残っており、安永二年以前であることは確かである。

肅條抱レ病鎖二柴門一　金錫翩翩日往還
丘壑千秋埋レ骨地　先君更住二沃洲山一
右禪軾

『先哲叢談續編』（七・「松崎観海」）には、藤山惟熊の註として「初為レ僧、曰二名禪軾、字轍外一、號二白石一」と、この人物と惟熊が同一人物であると記している。だが、同じ詩題で一人の人物に二首を寄せたとは考えられない。また『壺山集』（上）の五古「四子詩」においても「山子祥、竹子徳、軾法師、谷文卿」と明らかに二人を区別している。

○七月六日、蘭亭は危篤状態に陥り、同日没す。門人たちに見守られながらの往生である。管見に入った哭詩を掲げる。

「哭高子式山人八首」（『玉山遺稿』三）
「哭高子式三首」（『龍門集』二・四）
「哭高子式二首」（『熊耳先生文集』三）
「秋日哭高子式」（『南郭文集』四・一）
「哭東里先生六首」（『壺山集』下）
「哭東里先生四首」（『観海集』四）
「哭東里先生四首」（『蘐園集』後・一）
「哭蘭亭先生十首」（『藍水詩草』一）
「輓蘭亭先生三首」（『梅岡先生集』四）

○柩は遺言通り、圓覚寺壽蔵の地に葬られた。玉山「哭高子式山人」（其四）の註に「山人以二七月六日一卒七日夜發引渡二六郷河一八日往葬二于相中一」と経過が残る。鎌倉には、横山藍水と竹川政辰が赴いた（「墓誌銘」）。

○「墓誌銘」によれば、禪軾を除く四人が遺事を謀り行ったとある。その時の作として、観海に七律「秋日同子徳文卿集子祥宅修東里先生遺事有感」（四）が残る。

○蘭亭の人となりについて、「墓誌銘」の他に『蘐園雑話』は、

蘭亭は豪気の人にて、行儀甚だ正しく胡坐などせしことは曽てなき人なり。女房は十人ばかり持たり。

と伝える。その女房について『先哲叢談』は、

吾祖少年在二江戸一時。與二蘭亭一親善。嘗謂レ祖曰。余竟レ婚。媒媼云。有二二氏一。一則多二姿色一。而拙二女工一。一則有二才徳一。而貌甚寝。吁才色並茂。自二古為レ難一得焉。苟有レ一二於此一則足矣。余何之為レ妻。祖曰。愛レ色者。目見而後心悦レ之也。未二始有一見。則醜美何論。不レ如納二其善一刺繡一以使レ理二家事一也。蘭

亭嘆曰。誠然。誠然。非二交以レ信。孰能言レ之。然舎二才徳一娶二姿色一。夫婦雖レ不二必貴以レ徳。而亦不レ可二以レ色為レ主也。蘭亭惑焉。果六娶終無レ子。

と、蘭亭の人間味を如何なく述べる。原雙桂が江戸に来たのは、享保十八年頃、蘭亭三十歳前後のエピソードであろう。「墓誌銘」も結婚は六度と記している。だが、直接、私生活に触れる詩は探し得ない。更に、その子どもについては、『銀臺遺事』に

又、蘭亭が娘も、はやく父に別れて、よるかたなかりしを小君の御許にめさせ、あはれみはぐゝみ給ひて、今は姆になされたり。

とあり、先に「墓誌銘」に「一無レ所レ生」とあるのに矛盾する。これに類する人物として、[69]服部仲英の女に「肥後細川侯後宮に仕う」という者がいる。あるいは混同されたものか不明である。

◎宝暦八年戊寅　没後一年

○夏、『蘭亭先生詩集』刊。明月楼蔵板、嵩山房小林新兵衛発行。十巻六冊。門人藤山惟熊・竹川政辰・横谷藍水が輯し、序を観海が撰す。他に、本多壺山「題蘭亭先生詩篇」、巻末附録として「壽蔵記」、「墓誌銘」・跋文として大内熊耳と禅軾の「書蘭亭先生詩集後」がある。大内熊耳の跋文は『熊耳先生文集』には収められていない。観海にあてた尺牘によれば、自分はその任でないことと詩集の刊行が蘭亭の意志でないことが訴えられてあり（『熊耳先生文集』十四「與松崎君脩」）、この文が、熊耳の意でなかったことがわかる。『詩集』所収の詩数は、九百六十六首。「墓誌銘」によれば「萬有餘篇」あった詩は、死ぬ前に火に投ぜられた。前掲「病中寄五子」の藍水に寄せた詩中に「焚盡」という語を用いたのは、その暗示であろうか。火中に詩を投じた人物として、先に萬菴をあげた（元文四年の項）。又、父百里が世に出ることを浮薄としたことなど、影響を与えていると思われる。

○蘭亭著として『国書総目録』は、他に『蘭亭詩鈔』と『分類詩題苑』を載せる。前書は明治十五年に刊本から、近体詩を抜粋して写されたもの（国立国会図書館蔵）。後書は、彦根藩士と思われる増高實（字子徳）によって、南郭・蘭亭・東皋（野村公臺の号）の詩集より、詩題別に分類された詞華集（滋賀大学附属図書館蔵）。文化十二年成立。写本二冊。序を西郷義（平尾芹水）、跋を伴徙義（東山）が撰している。詩題を二十四部に分類（春夏秋冬等）、内訳は、南郭より六百三十六首、蘭亭より三百二十四首、東皋より三百四十二首、計一千三百二首を編集する。宋詩流行の中、彦根藩において、護園派がいかに盛んであったかという一証と言えよう。

その後、蘭亭の名は、一般に知られることが少なく、歴史の中に閉じこめられてしまう。伝を閉じるにあたり、横谷藍水の詩を引き、主なき明月楼のその後を見る。

秋夜夢與諸子集蘭亭先生宅覚後悵然有感寄贈君脩子祥

埋二玉湘山一已十秋　海天風雨暗二護洲一
問レ奇舊友渾星散　空夢當年明月楼

（『藍水詩草』六）

注(1)三村清三郎氏「烏石山人」・『近世能書伝』に詳しく載る。
(2)「服部南郭年譜考証」（『国文学研究資料館紀要』二）。
(3)愛媛文学叢書三『伊達村候公家集』によれば、同人には漢詩文集『楽山文集』『楽山外集』（伊達文化保存会蔵）があるという。
(4)「秋山玉山評伝(上)(下)」（『明治大学教養論集』九九・一〇八）

(5)『近世新畸人伝』所収。

(6)七律「軾上人赴湘中謁高子式墓賦此為別」(二)。

(7)『大日本人名辞書』等。

(8)『壺山集』(下) 七絶「哭東里先生六首 (其三)」の註に「明月楼前有二垂楊 此先生所 手栽 者」とある。

(9)「伊勢と篆刻家」(『三村竹清集五』) にその伝がのる。

(10)「病中寄五子」の禅軾に寄せた詩中、「沃洲山」とあり、白居易に「沃洲山禪院記」がある。ただ、大内熊耳に七律「送禪軾赴西京本山値開山國師五百年遠忌」(三) があり、この時期五百回忌が行なわれたのは、宝暦十一年の東西本願寺、親鸞五百回忌法会である。尚、同年に法然五百五十回忌、明和二年に栄西五百五十回忌が行なわれている。あるいは、浄土真宗の僧侶か。

(11)七古「石由之立峽中猿橋碑請島帰徳勒銘已成輒作墨帖因賦猿橋行贈之」(二)。石由之は、春臺門下石川隆英。

(12)観海に「源稷卿傳」(八) がある。

(13)『俠者行』(中野三敏先生蔵) の跋に「庚申 (元文五) 四月西涯滕豊昌」とある。豊昌が何者かは詳知しないが、この法帖が鳥石山人の書によっていることより、護園門と親しい人物であったと思われる。『先哲叢談』の記述はこの人物と近藤西涯を間違えたものかもしれない。

(14)『先哲叢談後編』にも一部引用されている。

(15)服部匡延氏「南郭系服部氏系譜」(『近世中期文学の研究』所収)。

〈付記〉本稿を成すに当たり、閲覧を許された国立国会図書館、内閣文庫、永青文庫、天理図書館、滋賀大学附属図書館に対し、深謝申し上げます。